

エバンジェリスト対談 2020年に向けた エンタープライズクラウドの展望

クラウド

コスト削減

パブリッククラウドの台頭

いよいよ本格的に普及期に入ったといわれているエンタープライズクラウド。コンシューマー領域から、エンタープライズ領域でも大規模な基幹系システムのクラウド化を計画している国内企業が増えているようです。本日は、黎明期からクラウドエバンジェリストとして活動されてきたVUE株式会社の桂島 航氏と、NTTコミュニケーションズの林 雅之氏に、エンタープライズクラウドの現状と未来、ハイブリッドクラウドの展望など、様々な角度から語っていただきました。

左から NTTコミュニケーションズ林氏
VUE株式会社桂島氏



クラウドエバンジェリストの仕事とは

NTTコミュニケーションズ 林氏(以下、林)：

まず、桂島さんと私は役割が似ていますよね。プロダクトマーケティング、製品広報、エバンジェリスト活動と様々な役割があると思いますが、具体的にはどのようなことをしていらっしゃいますか。

VUE株式会社桂島氏(以下、桂島)：

私は、チーフエバンジェリストとプロダクトマーケティングのマネージャーを兼務しています。プロダクトマーケティングは、日本企業にはあまりないポジションですが、米国では確立したキャリアパスになっています。この仕事は、どうすれば製品をみなさんに知ってもらい、興味を持ってもらい、買ってもらう、広めてもらえるか、マーケティングのサイクル全般に渡っているので、非常にやりがいがありますね。最近では、ストーリーを考えるだけでなく、自らがお客さまに直接お話しし、価値を伝導する「エバンジェリスト」の役割にとっても面白みを感じています。

林：

私もエバンジェリストとして講演を多く行っていますが、実際に基幹系システムのクラウド化を検討されている企業の方々とお話をする機会も増えています。その時に心がけているのは、自社製品ありきでお話するのではなく、エバンジェリストとして中立的な立場で、お客さまの状況にあった提案をすることですね。

桂島：

製品の売り込みよりも、お客さまの課題解決を優先しているのですね。

林：

そこはとても意識しています。また、最近は社内に7名の「クラウドスペシャリスト」が誕生しました。もともと、各業界向けに営業支援をしていた人材なので、業界の背景や、個々のお客様のニーズにより深く入り込めるようになりましたね。サッカーに例えると、エバンジェリストは今まで「フォワード」的な役割だったところを、最近は「ミッドフィールダー」のようにパス回しをするようになったといえるでしょうか。個人プレーで成果をあげるのではなく、より組織的な強みにできればと思っています。

エンタープライズクラウドを取り巻く市場環境

林：

ヴェムウェアでは、現在のエンタープライズクラウドの市場環境をどのように捉えていらっしゃいますか。

桂島：

そうですね。日本では、新たに導入するシステムのクラウド化は進んでいながらも、オンプレミスのシステムのクラウド化は、残念ながらあまり進んでいないように感じています。今年の4月にガートナー社からも発表がありました。2016年の国内企業におけるクラウド採用率は16.1%と、昨年比でもあまり伸びていません。当然、既存システムのクラウド化が進まないと横ばいのままです。オンプレミスをいかにスムーズにクラウド移行できるかが、エンタープライズクラウドの大きなテーマになっていると思います。

また、お客さまは、ERPなどの既存のアプリケーションと、IoTやビッグデータといった、差別化を図るための新しいアプリケーションを同時に管理しなければなりません。VMwareでは「One Cloud, Any Application」という考え方で、このような多様なアプリケーションをハイブリッドクラウド上で動かす際に、あたかも一つのクラウドインフラのように管理できる仕組みを提唱しています。

林：

その考え方は、とてもよく似ています。NTTコミュニケーションズでは、既存のERP等のアプリケーションを「トラディショナルICT」、IoTやビッグデータ等の新しい分野を「クラウドネイティブICT」と呼んでいます。

トラディショナルICTの分野では、ヴェムウェアをはじめとするパートナー企業と協業して「Hosted Private Cloud」という専有型のクラウド環境を提供しています。一方、クラウドネイティブICTの分野では、「OpenStack (オープスタック)」や「Cloud Foundry (クラウドファウンダリー)」等のオープンアーキテクチャを活用した共有型のクラウド環境を構築しています。このハイブリッドクラウド環境を、共通のSDN基盤上で提供し、まさにそれを世界11カ国14拠点に展開しているところです

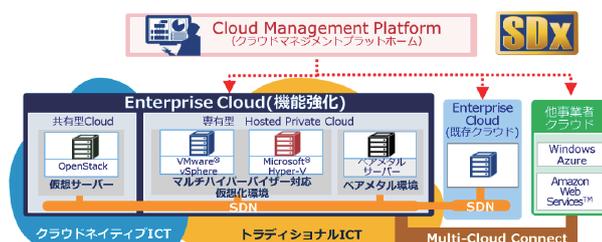


図1 トラディショナル、クラウドネイティブICTを統合管理できる「Enterprise Cloud」

クラウドを利用するお客さまのご要望

林：

実際にお客さまのところに伺うと、どのようなご要望がありますか。

桂島：

最近お会いしたお客さまで、「将来的にはクラウドに移行したいが、既存システムを大規模に移行するには、移行コストがかさんでしまう。今までのシステムの安定性やセキュリティを損なわない形で、徐々にクラウドに移行するには、どうしたらよいか」というご相談がありました。

現状は、VMware vSphereの仮想基盤で大規模にシステムを運用されているのですが、これをもしNTTコミュニケーションズの「Enterprise Cloud」に移行するとなった場合、「Enterprise Cloud」ではオンプレミスと同じvSphereハイパーバイザーをクラウド環境でも利用できるのも、非常にスムーズに移行できることがメリットになると思います。また、日々の運用ルールを変更することもないので、その点も評価されると思います。さらに、最近の新しいビジネスに対応すること、例えば「OpenStack」のように、開発者が利用しやすいようなクラウド環境を実現することも同時に求められるようになってきています。ハイブリッドなクラウドサービスを一体型の管理しやすいプラットフォームで提供することが、強く求められていると感じますね。

ハイブリッドクラウドの現状と今後

林：

ハイブリッドクラウドという点では、従来は、いわば「温泉旅館型」であり、温泉から一本の廊下を延ばして各部屋を利用するようなモデルでした。NTTコミュニケーションズが目指しているのは、「近代ホテル型」。つまり、フロントは1つだけけれど、VIPが長期滞在するルームや商談ルームなど、別々の目的の部屋があたかも1つのロケーションとして、管理できるようなハイブリッドクラウドでありたいと思っています。

桂島：

それは面白いですね。様々な品揃えのサービスを一つのフロントで対応する、という考え方ですね。

林：

さらに、ハイブリッドクラウドではネットワークレイヤーがとても重要になってくると思います。IDC社の資料によると、クラウド移行において約70%の利用者が「ネットワークの設計を見直す」というデータもありました。

桂島：

ネットへのアクセスが外部に出て行くので、クラウドへの移行は、ネットワークも含めて提案できなければなりませんね。

林：

NTTコミュニケーションズでも、クラウドサービスは、ネットワーク、データセンターを絡めて提案しています。また、ハイブリッドクラウドの世界では、一社単体で提供する時とは違い、他社との連携も考えなければなりません。「Enterprise Cloud」では、アプリケーションレイヤーは、「クラウドマネジメントプラットフォーム」で複数のクラウド環境を制御し、ネットワークレイヤーは「マルチクラウドコネク」で、AWS社やMicrosoft社のサービスと連携もしています。今後、ハイブリッドクラウドでますます連携が進んで行くと、連携のコスト、セキュリティの脆弱性、部門間の責任所在の明確化など、ハイブリッドクラウドならではの悩みも出てくると思います。

桂島：

そういった悩みがあるのは、お客さまが本格的にハイブリッドクラウドを活用されるようになってきたからともいえますね。

クラウド化においてIS部門に期待されること

林：

今後、クラウド化を進めるにあたり、企業のIS部門に求められるのは、どのようなことだと考えますか。

桂島：

そうですね。クラウド化を進めるには「よりプロアクティブに動くこと」だと思います。これからは、事業部門の要求にただ応えるだけのIS部門は価値が失われていくことになるでしょう。事業部門がイノベーションを起こすことを助けられるような役割が求められていますね。

林：

事業部門が新しいビジネスを立ち上げる時に、「デジタルトランスフォーメーション」のようにデジタル化を推進するシーンも増えて、IS部門の支援がますます必要になってきていると感じます。これまでは、事業部門から出される要件を受けている立場だったところを、対等なパートナーになる動きがでてきていますね。

桂島：

おっしゃる通りだと思います。それから、「プロアクティブ」という点で私が強く感じているのは、サイバーセキュリティへの対応ですね。最近では、攻撃方法も多様化していて、決められた設定はした、標準に則って対策した、としても事故がおきています。IS部門は、社内の専門家だけでなく、社外の意見もうまく取り入れながら、事業部門が安心してデータやインフラを使えるようなセキュリティの仕組みをつくるのが非常に重要だと感じています。

2020を見据えたクラウドの展望とは

桂島：

グイェムウェアでは、「Software Defined Data Center」という、サーバー上でストレージやネットワークの機能もソフトウェアベースで実現していくアーキテクチャを提唱しています。10年前、サーバーの仮想化技術を利用している会社は少数派でしたが、今や当たり前になっています。同じように、今はネットワークやストレージまでを仮想化している会社は少なくとも、10年も経たないうちにソフトウェアで動く時代になると思っています。

ネットワークやストレージが仮想化されると、低コストで俊敏なクラウドサービスが提供できるようになるので、その点でもNTTコミュニケーションズさんと一緒にしたいと思っています。近い将来Enterprise CloudにVMware NSXやVMware Virtual SANのようなネットワーク/ストレージ仮想化を実装しサービス提供頂ける事を楽しみにしています。

林：

今後、クラウド化を進めるNTTコミュニケーションズでも、「グローバルクラウドビジョン」の中でサービスのSoftware Defined (SDx)化を謳っています。今後はネットワークを含め、フルレイヤーでソフトウェア化を推進することになるので、その点でもグイェムウェアさんと強く連携できるのではないかと考えています。

私個人としては、「Software Defined (SDx)」は、将来的に「AI-Defined (AIx)」のようにソフトウェアの延長線上で、AIがあらゆることを自動で定義できるようになるのではないかと考えています。そうすると、両社の連携がますます重要になりますね。



サービス紹介

» Enterprise Cloud

NTT Comの「Enterprise Cloud」であれば、VMware vSphereをクラウド環境でも利用可能なため、既存のシステムを非常にスムーズに移行することができます。従来蓄積してきた運用ノウハウをそのまま継承できることも見逃せないポイントでしょう。



NTTコミュニケーションズ株式会社 クラウドサービス部
公式サイト：<http://www.ntt.com/enterprise-cloud>

© NTT Communications Corporation All Rights Reserved